66　函館医学校生徒記録

石崎　達

米人スチュワルト・エルドリッチは北海道開拓使雇医師として官立函館病院に於て明治五年八月より同七年十一月に到るの間医学校を開設し、官私費生二十名に基礎・臨床医学に就て毎日（月―土）一課目づつ講義をした。官費生の一人石崎鼎五は松本順の推薦で生徒となり、講義を筆記し、その他の記録も残している。

生徒年齢は十四～三十一歳で鼎五は二十三歳であった。生徒の大半は既に或程度の西洋医学を学んでいたと思われる。生徒は大部分が東北出身で、これに北海道・関東・北陸・兵庫県が加わっていた。

エルドリッチは英語で講義し、これを通訳者がいて日本語に通訳した。生徒は口述を速記して、後日清書している。講義内容は解剖学・生理学・治療学（内科）・外科学・産科学・婦人科学・眼科学・医事政治学・薬剤学など医学全般に及んでいる。

エルドリッチの講義は後日に本多公敏の訳述編纂により『近世医説』として出版され、第二号と第三号が現存している。このほかに数種の訳述本がある。

出版されている記録と年代がずれるが、鼎五の日記からは明治八年三月より五月に到る間に行われた種痘巡回が記録されている。函館近郊の巡回で過重な行程であった。

鼎五は医学校卒業間近に父を亡くし、医学校中途退学願を開拓使長官宛に出した。その文章中に明治七年二月二十五日入学、明治八年八月に退学の記載があり、これによると明治八年迄エルドリッチは函館病院に勤務したことになる。また官費生は卒業後五年間北海道で医療に従事する義務があった。

明治十九年エルドリッチは横浜十全病院外科部長の職にあり、鼎五に対し医師の資格証明の英文証書（公文書）を発行した。この証書には菊御紋章押印があり、鼎五は医学校に於て基礎臨床医学の教育を受け、診療技術に経験を積

み、立派に医師として役立つことを証明すると書いてある。医師免許証交付に当り恩師に頼んで修業証書の代りに発行したものと考える。

（獨協医大アレルギー内科）

67 明治期におけるブライト氏病の受容について

会田　恵

先の第九一回本会総会（平成二年四月）で、演者はブライト氏病の日本での最初の紹介について述べたのであるが、今回は明治期（一八六八―一九一一）の本邦において、本症がどのように受容されていたかについて概況を述べる。

先ずブライト氏病という呼称については貌麗都腎病（ボードイン日講紀聞）、ブリフト病（「華氏内科摘要」）、武雷篤病（内務省衛生局訳「七科問答」その他）、ブライト病（井上内科新書）と変遷がみられるが、概ね明治十年頃から武雷篤病という名称が定着しているようで、ベルツの内科書でも武雷篤病と記載されている。

ベルツは東大で病理学総論を十年間講義しているが、彼の内科書の急性腎炎の項には剖検所見を約一頁説明してあ